坂口禮子（れいこ）・〈蕃地〉小説の世界

――熊本時代の執筆活動を中心に――

楠井清文

一　〈蕃地〉小説の位置づけ

坂口禮子（一九一四～二〇〇七）は熊本県八代に父・山本慶太郎、母マキの次女として生まれた。八代高等女学校、熊本女子師範学校を卒業後、三八年台湾に渡り小学校教員となった。体調不良のため一時帰郷するが、台中の公学校教員で、妻と死別した坂口貴敏と結婚するため四〇年再度渡台。貴敏の勧めにより、また禮子自身も雑誌投稿の経験を持つなど文学への関心を持ち続けていたため、縁故のあった『台湾新聞』へ作品を発表し始める。その後、雑誌『台湾文学』同人となり、「灯」（『台湾文学』四三・四）で台湾文学奨励賞を受賞。作品集『台湾文学叢書一　鄭一家』（清水書院　四三・九・七）、『台湾文庫三　曙光』（盛興出版部　四三・一二・一八）を相次いで刊行した。

坂口と、台湾原住民の居住地である〈蕃地〉[1]との深い関わりは、四五年四月台中市から能高郡蕃地中原へ疎開したことに始まる。中原は後述するように霧社事件の際、日本側に属したいわゆる「味方蕃」を住まわせた土地であり、隣接して事件の生存者を強制移住させた川中島社があった。ここで坂口は家族と共に、敗戦を経て四六年一月までの十ヶ月間を生活する。この地での体験が、戦後坂口の創作の原動力となった。

四六年三月に八代へ戻ると、しばらくは地元文芸誌に作品を発表していた[2]。また師と仰ぐ丹羽文雄主宰の文芸同人誌『文学者』にも参加。新潮社文学賞を受賞した「蕃地」（『新潮』五三・一〇）は、戦時下に発表しほぼ全文削除となった「時計草」（『台湾文学』四二・二）の主題を受け継いだもので、日本人男性と原住民女性との血を引く主人公・純が、帰属意識の不安や出自による蔑視に苦しみながら、日本人女性・真子と結婚し、敗戦時には原住民の側へ立とうと決意するに至るまでを描いた作品である。

これ以降も「ビッキの話」（『文学者』五三・七）、「遠い火」（『別冊小説新潮』五四・一）、「霧社」（単行本『蕃地』新潮社　五四・三・一五　書き下ろし）、「蕃地の女　ルピの話」（『別冊小

説新潮』五六・七)、「蟷螂の歌」(『日本談義』六〇・一～六一・三)、「蕃婦ロポウの話」(『詩と真実』六〇・一一)、「蕃地のイヴ」(単行本『蕃婦ロポウの話』大和出版　六一・四・五　書き下ろし)、「タダオ・モーナの死」(同)などを発表し、「蕃地作者の称号」[3]を得た。

戦後、坂口が原住民の登場する小説を書き続けた理由は何だったのだろうか。渡台から引揚までを描いた自伝的小説「蟷螂の歌」で、基隆から出航する主人公・立子(りゅうこ)は、「台中のあそこにもここにも(中略)山の、パパイヤの木の下に、鉄橋線の上に、蕃社のザクロの木の根つこに、あなたや私や子供達が、今、いるような気がするわ」と語る。また坂口自身、「蕃地」という言葉に「ふるさと」のような「なつかしさ」を感じると述べ、その土地は「私のなかに生きている」[4]と述べている。戦後も持続する植民地の記憶が、〈蕃地〉という題材を選んだ強い動機だったのは確かだろう。しかし、単なるノスタルジーに留まらない積極的な意図もあったことが、次の言葉から分かる。

> 蕃地は、今日の私の問題を展開させる舞台でしかなく蕃人はすべて私の分身だった。蕃地作家とよばれることにはにかんだ時期もあったが、素材がそこにあるというものではなく、私のイメージとモチーフを最大限にいかす場として、私は折りにふれて描き、それがある程度成功したのだと思えば、私はしゅう(ママ)恥も抵抗も感じるいわれはないのだ。[5]

坂口は〈蕃地〉を扱った小説が、内的な「素材」や「問題」に基づくものだと強調している。これは、例えば新潮賞受賞の際、師の丹羽が「新しい文学的な試みはされてゐないが、台湾の蕃地といふ記録的になりやすい世界が十分にこなされて、そこの生活が過不足なく描かれてゐる」「素材主義の文学といはれるかも知れない」と語ったように(「選後評」『新潮』同号)、特殊な題材に依拠したと評価されやすかったことへの反論だと考えられる。作者にとって〈蕃地〉は、自己の「問題」を肉化し形象を与えるための場だった。

本稿では、〈蕃地〉小説で描こうとした主題を考察するために、同時期の文章に着目する。〈蕃地〉小説のほとんどは、六二年上京までの熊本在住期に執筆された。この時期の活動について、「坂口襦子著作目録」を編纂した中島利郎は、「戦後は『熊本日日新聞』『西日本新聞』などに発表されたものがある」が「現在のところ未調査である」と記している[6]。今回、『熊本日日新聞』『西日本新聞』掲載のエッセイ類を調査した結果、創作方法や問題意識を語った文章を多数発見できた(資料参照)。これらを踏まえつつ、〈蕃地〉小説の世界について位置づけを試みたい。

二　霧社事件の形象化

坂口は、「私が霧社事件に関係のある、タイヤル族霧社蕃の人々について語ることができるのは、一九四五年四月から、一九

四六年一月まで十カ月間、彼らの住む移住蕃社中原に暮したからである」と語っており[7]、彼女の〈蕃地〉体験と霧社事件の記憶が密接に関係していたことが分かる。それは「一度は、霧社事件を書いておかねばならない[8]」という創作動機に繋がっていた。

三〇年一〇月発生した霧社事件は、霧社に居住する原住民六社の武装蜂起であり、軍・警察の近代兵器によって鎮圧後、蜂起に参加した生存者は「保護蕃」として強制収容された。しかし三一年四月以前から敵対関係にあった「味方蕃」の襲撃に遭い（第二霧社事件）、残った約二七〇名が川中島へ移住させられ、その後も関係者の投獄・処刑は続いた。

呉密察が歴史学の観点から述べるように、霧社事件は原住民が文字記録を持たなかったため、官憲側の文献によってしか全容が把握できないという困難があった[9]。また総督府は、事件直後から報道統制を敷き、解禁後も「事件ノ動機原因ニ関スル憶測」「惨忍ナル光景ノ描写」「警察ノ威信ノ失墜」「民族的ニ有害ナル記事」を厳重に検閲するなど干渉し続けた[10]。三一年には「霧社事件の顛末」を公表、「事件の原因」について、「蕃族伝来の馘首闘争の性癖」「伝統の迷信」「奇怪なる習性」による「群集心理」の発現として、原住民の未開性に理由が求められ、また事件の発生も偶発的なものという見解を流布した[11]。

坂口は疎開後、タイヤル族の娘・大石フミらと親しく交際したが、彼女達は事件について沈黙を守った。また他の原住民も「川中島社が、反抗蕃の生存者で、中原が味方蕃だったが、彼らのどちらも、霧社事件のことについては、語ろうとしなかった」（「蕃地作者のメモ」）。恐らく彼女は、日常的に交流する彼らの深層に潜む、事件の根本要因について理解したいという、もどかしい思いに駆られたのではないだろうか。

私は、中原で多くのタイヤル人を識つた。タイヤルを識るにしたがつて、私は、霧社事件に興味をもつた。しかし、彼らと私とでは、彼らがおぼつかなく語る、日本語だけが通じあうことばで、しかも彼らには、まとまつた何かを順を追つて話すということはできなかつた。（中略）私は、唯、彼らを皮膚で感じるだけだつた。（中略）単純素朴な彼らに、それほどの虚しい激烈な抵抗をさせたものが何であつたか。おそらく、誰にも真実を語ることはできないだろう。私が、わずかな資料をたよりに、事件を描くのは、全くの冒険。的は、常にはずれているにちがいない。それでも、尚、私は書く。書かずにいられない。

事件をひきおこすには、それだけの必然がなければならず、ではその必然を、どう発見すればよいのか。私には、十カ月間の蕃地生活がある。それをたよりに、タイヤルを描き、帰納的に発見する他に方途はない。

（「タダオ・モーナの死」）

不完全な資料や言語不通という困難な条件下で霧社事件を描く

ことが、坂口の文学的課題となった。この課題は、三つの様式を通して表現されていると考えられる。第一に「時計草」「蕃地」では、事件の遠因となった理蕃政策、特に日本人巡査と原住民女性の結婚に焦点が当てられている。これは坂口自身、女性の結婚を重要な主題として捉えていたためであり、次章で詳しく考察したい。

第二に「ビッキの話」「蕃婦ロポウの話」では、生き残った女性達による事件の語りが扱われる。「戦後の霧社事件研究とは、事件の過程で幸運にも死を免れた台湾原住民に口を開き語らせることであった」（呉前掲論文）とあるように、文字記録の少ない事件を知るためには体験者の「証言」、つまり記憶に基づく口承が求められた。客観的な記録と違い、語りは個々の体験に即したものであり、ここでは蜂起に直接参加しなかった女性達の立場から語ることで、事件の別の側面に光を当てようとしている。

第三に「霧社」「タダオ・モーナの死」では、事件自体を再構成する試みがなされており、登場人物の内面に直接分け入った描写がなされる。ここで作者は、事件発生に至る人々の心理を辿ることで、その「必然」を理解しようとした。だが作者の想像を交えて事件を描くことは、史実の恣意的な歪曲を免れないのではないだろうか。坂口はこの問題について、「事実」と「真実」の違いとして認識していた。「霧社」の執筆意図について、「在るがまゝの報告」ではなく「事実と虚構とに立つた真実」を描くものだと述べ、

一つの事件がある。それを誰かが小説にする。すると、その作品中の些細なことまで、その事件の「事実」だと思いこむ。（中略）小説中の「真実」には、作者自身の「ある時」の顔があり、作者の姿がある。しかし「事実」には、作者はいない。だから、責任もない筈である。もつと具体的に言えば、作者の責任は、書かれている文章とその内容とにあるのではなく、その行と行の間、文字と文字の間にある。作者の「真実」にあるのだ。[12]

とする。また「モデルと小説」の関係について、「実在の人物に仮托して、作者のイメージをより鮮明に彫りあげる場合」には、「作者が、その時抱いていた混沌の世界がモデルによつて一つの方向へ昇華される」ものであり、「事実そのものが小説として再現することはあり得ない」とする。

こう言うと、作家は、事実や人物を自己流にデフォルメして、読者に押しつけているように思われるが、作家が如何にデフォルメしようとも、事実の中にある真実性は、見失なわれていない筈だ。真実をいかにつかむかは、作家の誠意と努力であつて、作家の不誠実は、表現された作品の中に自ら発見される。[13]

作者は「事実」に触発された「真実」を虚構の形で表現する

が、それは作者自身の内的なものであり「事実そのもの」の「再現」ではない。作者の「責任」や「誠実」は、その内的「真実」にいかに忠実だったかにある、ということだろう。「霧社」では首謀者モーナ・ルダオ、タダオ・モーナ、花岡一郎（ダッキス・ノービン）と二郎（ダッキス・ナウイ）、その妻ハツエ（史実の日本名は初子、オビン・タダオ）、日本人警部補・佐塚愛祐ら、事件の関係者をほぼ実名で登場させ、彼らの心理描写を行っている。特徴的なのは、資料から窺い得ないような人々の内面の逡巡・葛藤・苦悩に多くを割いている点だ。例えば「日本人同様の教育課程」を受け、霧社の「模範」青年とされた花岡一郎の奥底にある孤独感を描く。

一郎は（中略）台中師範にいた三年間に、彼に向けられた、幾種もの、侮蔑、無視、嘲笑、そして又、親愛を思い出していた。同窓生は、彼に向つて、様々なポーズをつくつた。そのどれもが、結局は、被征服者と征服者との間の、微妙な対立に他ならなかつた。わびしい生活だつた。誰一人、彼を、一箇の、たゞの人間として向合つてはくれなかつた。

一方、花岡兄弟の親代わりであり、「蕃地の土になる」決意で原住民女性と結婚した佐塚の密かな苦悩も語られる。

混血の彼女の将来を思う時、佐塚の心は寒々と風を感じる。まだ女学生の彼女が、父親をなくした後、どのように、女一人の命を生かしていくか。蕃婦を妻に持つことは、子供に母を与えぬのと、同様の結果であることを、佐塚は身にしみて思うのだ。

また「タダオ・モーナの死」では、モーナ・ルダオの長男で、事件でも主導的な役割を担ったタダオ・モーナを生い立ちから描いた。少年期の彼は、内地人子弟と差別されるタイヤル族であることに疑念を抱き、「なぜ、オレ、マヘボのタダオ・モーナですか。どうして、日本内地の子供ではないですか。オレが、なぜ、マヘボにいるのか、わからんのです」と訴える。蜂起に至る内的必然性を形象化することで、共感可能な人物像として描き出している。

三　異民族結婚から見た〈蕃地〉

初出「時計草」は、前述のように最初と最後の一頁を除いて削除されたが、単行本『鄭一家』に改作して収められた[14]。垂水千恵が指摘するように、初期作品には「結婚を避け続ける旧家の娘、というモチーフ[15]」が存在し、それは「鄭一家」（『台湾時報』四一・九）「時計草」「蕃地」のような、女性の目を通して異民族間結婚の困難を描いた作品に継承される。興味深いのは、初期の結婚忌避という主題が、「血」の問題として描かれる点である。例え

ば「破壊」（『台湾新聞』四〇・一二・四、七、一一、一四）には、古い「血統」に伴う「劣性遺伝」を恐れ、「古い穢れた血は、自分の内部にある劣性な血統、淫蕩な血潮は、自分から他へ流れていつてはならぬ。この醜い血が、子や孫や又その子へと流れてゆく事の恐ろしさは、自分があらゆる苦悩に耐へて生きてゆく事で、産れないのである」と結婚を拒み続ける女性主人公が登場する。

星名宏修は、この小説を基に坂口の作品における「優生学」的発想を指摘し、「時計草」で純の父・玄太郎が語る「理蕃政策」の理念と関連づけている[16]。かつて玄太郎は、原住民女性テワスルダオと結婚したが、妻と子供達を置いて内地へ帰郷した。成人した純は、父の紹介で内地人女性との縁談を勧められるが、出生のため二度破談に終わっていた。

純のモデルは、警察官・下山治平とペッコタウレの間に生まれた下山一（はじめ）である[17]。当時、警官と原住民有力者の娘との政略結婚による懐柔策が総督府により進められており、下山はその第一号だった。この結婚は三年を経れば破棄できるという一方的なもので、下山は別の日本人婚約者と二重生活を送っていたことが当局に露見し、内地へ帰還した。その際、タイヤル人女性二人を同道して見せ物にすると言い出したため、ペッコタウレは内地行きを拒否した[18]。

日本人巡査と原住民女性との関係は、〈蕃地〉に多く認められていた。霧社事件後に刊行された鈴木作太郎『台湾の蕃族研究』[19]は、「日本人の蕃婦と関係した例は蕃界勤務の警察官其他の独身者に少くない。蕃婦を婦妾としてゐる者は全島を通じて数十名に上るべく、就中霧社方面には其の等の「ローマンス」があつて此の度の霧社事件に関しても若干の因をなしてゐる」としつつ、「蕃人と親属関係に立ち了解融和すれば延いては彼等の撫育上に資する所大なるものがあることを閑却してはならない」と述べる。事実上、両者の結婚は継続せず、原住民側に悪感情を残して終わることが多かった。「時計草」でも「M事件」の要因の一つとして、「頭目の妹が、某警部と結婚したが、それが破鏡に終つた事についての、頭目の肉親への愛憐と、内地人への反感」を挙げている。

「鄭一家」で内台結婚を描いた坂口は、ここでも民族間の婚姻や混血児の自己分裂というテーマを見出したのだろう。「時計草」では三人目の相手・錦子との話を進めるため、玄太郎は純を呼び寄せ、自身の抱いていた理想を語る。

> 理蕃政策と言ふのは（中略）民族政策の事だ。（中略）私は、文化を持つた民族政策に就ては、今何も言ふ必要はないが、未開の、何等系統的な経験も文化も持たぬ者に対しては、いろいろ考へたものだ。（中略）私は、彼等は治めるのではなく、倶に成長してゆくべきだと考へた（中略）文化を持たぬ者は、彼等の中に喰込んで、彼等の手をとつてのばしてやらねばならぬ。

私は、彼等の中に喰込まふと思つた。それにはどうしたらよかつたらう。彼等の中に私の血を混ぜるしか、道がないではないか。私を源にした子が、孫が、文化人の血を山の人達の中で育てゝゆく、其処に自らな民族経営が行はれると思つた。

星名が指摘する通り、ここには原住民＝「文化を持たぬ者」／内地人＝「文化人」という優劣が前提とされており、結婚＝混血によって前者を後者の位置まで引き上げるべきだという論理が見られる。しかしその結果生まれた純は、「何れにも属せない自分の血」に「雑婚のもつ哀しい孤独」「やるせない哀愁」を感じ、玄太郎もまた「私一人の蒔いた種子」「不運な芽」と語る。そして純は「高砂族の血」を「自覚」し、玄太郎が霧社から持ち帰った「異郷の時計草」のように「高砂族の中で育つていかう」と決意する。「民族の血が純潔であらねばならぬ」という理由から縁談を断ろうとする彼に、錦子は次のように訴えかける。

私は嫌です。私は貴方のお傍を離れません。一緒に参ります。（中略）日本の女は、一度心の中にこの方と決めた方が、翌朝亡くなられても、一生独りでをります。戦ひに出征く人を無理に願つて式を早め、戦死なさつた後、清くすごしてゐる方もあります。娘の侭、写真を夫としてすごす方もございます。（中略）高砂族の文化を、日本の伝統に少しでも近寄らせ高めるのも前進ではないでせうか。私はきつとお役に立ちます。御一緒にお伴さして下さいませ。

この言葉を聞いて、純は「戦ひの庭に進みゆく幾万の力強い足音」を聞き、「帝の命のまゝに」「今こそ倶に行かむ！」と思う。この結末について、星名は「玄太郎が「雑婚」によって果たそうとした「民族政策」（中略）は、「高砂族」教育（中略）にたずさわる純によって、たしかに継承されることが予告されている」と述べ、具体的には「戦争＝「高砂義勇隊」へといざなうこと」に繋がると論じる。首肯できる指摘だが、初期の結婚忌避という主題が、どのように錦子の結婚の意志に結びつくのかを、その内面に即してより分析する必要があるだろう。

玄太郎が「優生学」的発想に基づき、民族間の結婚＝混血を進めようとしたのに対し、錦子には純の「妻」になる決意はあっても、「母」になる意識は見受けられない。また「高砂族義勇隊」のラジオ報道を聞いて、にわかに原住民への認識を改める周囲の人々に距離を置き、あくまで「純の人柄に信頼しての結婚」と考える。異性間の個人的な結び付きを優先する錦子は、戦時下賞揚された国家のために「生命を与える（産む）母性」[20]という女性のステロタイプには、必ずしも適合しないのである。

戦後同じ主題を描いた「蕃地」では、各登場人物の内面がより深く掘り下げられている。純の葛藤は、「父の結婚そのものが、理蕃政策の功利的な手段の上に打建てられた空虚なものだと思

い、そうした政策によつて計画された自分の生を、耐えがたい屈辱だと思う」とあるように、批判的な面が打ち出されている。また「自分と似た一人のモデル」として花岡一郎を思い、「理蕃政策の方向に向つて歩かせされ、振向くことも傍目も許されなかつた」一方で「待遇は蕃人並み以上にはなれなかつた」とする。そして混血の悩みは、自分のような存在を生み出した植民地政策への憤りと結びつけられている。

我でない我を新しく存在せしめようと祈る気持なのだ。純潔の血の流れる体を！　音立てて流れる純の血は、赤と黒に分れている。二つの違つた血。何方の種族にも属せぬ、第三の種族。そして、それを生み出した人為的な意志。沸々の噴き上つて来た憤りは、再び、あきらめと慟哭の中に沈んでいく。

純の妻・真子の形象も「時計草」と異なる。錦子が、最初から純の出自を知って結婚を決意するのに対して、真子が知るのは嫁いだ後である。彼女は純の母・サツキと初めて出会った時も、「見慣れぬ異種族の女」と思い「私、蕃人、初めて見たわ」と告げる。真相を告げられて衝撃を受けるが、サツキの死に際して事実を受け容れる。

真子を母に逢わせると、サツキの眼が、キラキラと輝いた。

――純さんは、いゝ人です。よろしくたのみます――そう言つた。真子は、入墨をしているサツキの額にそつと手を当てて、うなずいてみせた。（中略）女達にはそれで十分通じ合つた。

「時計草」では触れられなかった、純の母と妻という似た立場の女性同士の信頼関係が、この小説の主軸となる。やがて純に思いを寄せていた原住民女性フミが、警備隊の士官候補生・牧によって妊娠させられ、フミは「内地人とタイヤルは、何時も、何方かが相手を傷つける」と思う。一方純の中には、従属的立場に慣らされてしまった原住民女性への憤りが生まれる。

純は、一粒の麦になり、此の地に根を生やそうとしている。フミの妊娠はその意味では微笑ましく、心弾むものがなければならない筈だつた。それだのに、純は、フミの話を聞いている中に、それが、暴力によるものだと知ると、苦が苦がしいものがこみ上げて来た。日本人に対する、生れながらの劣等感と憧憬とが、フミがどう弁解しても、暴力を易々と受入れたのだという気がする。

敗戦に際して牧は自殺し、遺児を養子として引き取ろうとした純が知ったのは、自身の戸籍が母の「私生児」として登録されていた事実だった。元来、台湾人・朝鮮人など「外地」出身者の戸

籍を「内地」に転籍することは禁じられており、三二年内台共婚法が成立すると結婚・養子等による「内地」籍への移動が認められた。[21] しかし真子は「戸籍が汚れるから」という理由で、サツキと純の「内地」籍獲得がなされなかったと聞かされる。いち早く真相を知った彼女は、混乱し謝罪する純に、「私は、貴方の妻になつたんですもの。（中略）戸籍なんて、どうでもよかつたのよ。だつて、林田壮吉という、ちやんとしたお父様と、サツキというお母さんがあつた、ということは事実ですもの。私、お母さんを信じました」「貴方の出生は純粋で疑を持つことがない」と語りかける。

原住民による暴動発生の噂を聞いた純は、理蕃課主任に連絡しようとするが、「パーランへいらつしやるのでしよう?」という真子の言葉に後押しされ、「サツキによつて、蕃社へつながる男」として「日本人としての自分を振り捨てよう」と決意する。

「蕃地」発表前年の五二年、政府は台湾人・朝鮮人ら旧植民地出身者で、「内地」へ転籍した者以外は、日本国籍を喪失し「外国人」になったという見解を示した。「かつて「帝国臣民」たることを強制した者」を、今度は一律に「外国人」扱いすることで「歴史の抹消」を果たしたのである。[22] 純や養子となる遺児の霧子ら、混血児の出生には日本の植民地支配が深く関わっているが、彼らは戸籍から排除されていた。そして戦後は国籍を剥奪することで、存在自体が日本から抹消された。「蕃地」では、この二重の排除を受けた人間が、主体的に自己を回復する姿を描く。そして純との間に子供がなく、血縁的な絆を持たない真子は、ここでも自身の意志で彼と同じ立場を選択するのである。

四　共有される「蕃婦」の物語

先行研究では、植民地で活躍した数少ない日本人女性作家であり、植民地をリアルな視点で描いた点が高く評価されてきた。[23] 一方、その描き方に批判的な論考も出ている。例えば李文茹は「鄭一家」をジェンダーの視点から分析し、「殖民地台湾の女性をオリエンタルな眼差しで後進的、受動的に描写し、台湾を帝国より下位に位置づけ、支配を正当化する」ものだと論じた。[24] また戦後の「蕃婦ロポウの話」についても、「自らの性欲に対する渇望を赤裸々に語る「蕃女」のイメージ」と「日本人である「私」」とを「差別化」していると指摘する。[25]

確かに坂口の〈蕃地〉小説で描かれる原住民女性は、性的側面に焦点が当てられることが多い。しかしそれは単に「蕃女」の未開性を際立たせるためだろうか。ここで参照したいのは、日本人文学者による原住民女性の表象である。これらのテキストで彼女達は、しばしば強い性衝動を持つ存在として描かれてきた。例えば田山花袋「山の巡査達」（『雄弁』一八・一）では、山地勤務の日本人警察官の談話として、次のように語られる。

『それに、蕃婦が面白いですよ』聴手の上手なのに、所長は

益々釣り込まれて、『娘もあり、人の嬶もあるさうですが、それが中々人情があるさうです。何うしても、此方から言ふことを聞いてやらずにはゐられなくなるやうに持ちかけて来るさうです。兎に角内地人は惚れられるんですな。惚れたとなると、毎夜、毎夜、小屋へやつて来るさうですから。その癖、それは蕃婦に取つては重大な命がけのことなんです。それが知れれば、もう種族から指弾され、虐待され、中には殺されるのもあるんですから……。

命の危険を顧みず「内地人」への恋情を示す「蕃婦」に対し、警官は「あの入墨をした女を嬶にするわけにはいきませんからな」と述べる。原住民女性の習慣である「入墨」は、「内地人」に受け容れがたい未開性の象徴として扱われている。また大鹿卓の作品にも、「思はず奥さんの顔へ目をそゝいだ。そして、彼女が蕃婦だという証を見出してはつとした。額の濃いお白粉の下に、拭へない憂愁かなどのやうに、刺青が息してゐるのだ」（「野蛮人」『中央公論』三五・二）、「彼女達の刺青に反つて一種の魅力を覚えだしてゐた」（「蕃婦」『海豹』三三・七）という描写が散見される。

このように「蕃婦」の表象では、「入墨」が原住民女性の他者性を強調する記号とされた。それは彼女達を、性的欲望の対象であり異質な未開人でもあるという、両義的存在として位置づける眼差し、つまり植民地支配者である男性の視線に基づくものだった。これに対して坂口の「蕃地の女――ルピの話――」は、原住民女性の通過儀礼として「入墨」を描く。重要なのは、それを主人公ルピの視点から捉えている点である。

ルピナウイが入墨をしたのは、十三歳の冬だつた。ルピは、母親の入墨をはじめ、蕃社の女達のそれを、余り美しいとは思つていなかつた。むしろ、入墨のない白いなめらかな皮膚の方が、ルピには美しいような気がした。男達が、何故、わざわざ入墨をした女を妻にしたがるのか、不思議でならなかつた。妻になるための一つの資格として、入墨をするのであるならば、ルピは拒めるだけは拒んでみたいと思つた。

成人女性の徴である「入墨」に対して、ルピは違和感を覚える。なぜならそれは「妻になるため」の「資格」を得ること、つまり男性の欲望の対象となることを意味していたからだ。「入墨」は共同体の性規範を象徴しており、ルピの嫌悪は「妻」＝共同体の性役割を受け容れることの拒否と読める。しかし母の思惑により、彼女は歳の離れたタッコンと婚約することになった。その介添え役となった年長の女性テワスは、「入墨を拒否し」たため、「蕃社では別格の扱いをうけて」おり、「人交りできぬ女」とされていた。

なぜ介添え役が必要だったのか。それは幼妻であるルピに代わ

り、婚約期間中に結婚相手の男性を繋ぎ止めるためである。「絶対に男の妻になれないテワスならば、男が、どんなにテワスと情交が重つても、安全だつた」。「入墨」のないテワスは、「妻」の資格を持たないため、婚姻関係を乱すことはない。同様の役割を彼女は度々行ってきたが、「いどまれゝば男と情交を通じ、そして、それだけだつた」。蕃社の男性達は、「未練を残しながら、テワスが白面の女で結婚できないということで、入墨した許婚者との結婚生活へ落着いていく」のであり、逆に女性達から悪評を立てられる。しかし彼女は、正式な「妻」と「情交」の対象という男性のダブルスタンダードを機能させ、婚姻関係を維持する上で共同体に不可欠な要素でもあるのだ。

ルピは「テワスが、何故入墨をしないのか、誰にもその理由がわからず、入墨の痛さをこらえきれぬ小心者という、蕃社の勝手なレッテルがはられている」と考え、「蕃社中が、皆で、この罪もない女を不当にいじめているような気」になる。しかしタッコンとの夫婦生活が上手くいかず、「入墨をしただけでは、女になれはしない」と絶望し自殺する。その死を悼んだテワスは、「入墨」をしなかった理由を語る。それは「内地人巡査」下田との約束のためだった。

オレ、下田さんと寝たでや。何度も。誰も知らんかつたな。（中略）下田さん、な、オレに入墨せんと待つとれ、嫁にすると言うたぞな。したが、平地勤務にきりかわると、内地人の嫁さんもろて、山にはそれつきり来ンかつたでや。オレ、それでも待つとつたで。入墨せんとな。（中略）オレ、下田さんが嘘ついたこと、気イついたでや。オレ、それで、それからは、男に嘘をついたぞな。嬉しくもないのに嬉しそうにノド鳴らし、鼻いき荒くしてみせて、男をオレのところにひきつけたぞな。そのうち、オレの嘘、嘘でなくなつたでや。オレ、女ごになつたでや。

ルピが共同体の性役割に適合できず死を選んだのに対し、テワスは「蕃社」の性役割から逸脱している。だが、それは「内地人巡査」という植民地権力の末端によって、従来の性規範が攪乱された結果である。彼女もまた、「内地人」男性の一方的な欲望充足に利用されたのだ。ただテワスは、与えられた性役割を「嘘」と知りつつ演じることで「女ごになつた」ために生き伸びることができた。この小説は、植民地について支配者／被支配者という枠組みでなく、ジェンダーによる支配関係という別の捉え方を提起する点で重要なものである。事実、この作品発表と同時期に、坂口は社会的に女性性を構成する性規範への苛立ちを、かなり率直な口調で語っている。[26]

同様の主題は、「蕃婦ロポウの話」でより展開されている。この作品は、作者同様中原に居住する日本人女性の「私」が、第二霧社事件で移住してきた原住民女性ハツエから、ロポウという「蕃婦」の物語を聞くという形式を取る。この小説でも「初潮を

みた娘は、お定まりの入墨をしなければならない」とあり、ロポウは「入墨」をした結果「おかしげな顔」に変わる。ロポウの夫ノーカンは霧社事件に参加して死亡するが、ロポウは遺児を育てるため生き残った。別離に際し、彼女は「生きのびるのは忘れ形身のおさな子のため、おのれが喜び悲しみを味うためではない」と誓い、以後は「ストイックな、自分を罰しているような」生活を送る。しかし亡夫そっくりの片山巡査に出会い、関係を結んでしまう。自責の念に駆られたロポウは、川中島への移住途中に断崖から片山と身を投げて、無理心中を遂げたらしい。

ハツエを介して語られるロポウの物語は、曖昧さや本筋からの逸脱が目立ち、同時代評価でも指摘されたように「非現実の女」（友田隆「前号の合評会から」『詩と真実』六〇・一二）という印象を与える。例えば「ノーカンとロポウの別離の場を細叙するハツエ」に、「私」は「感じいり涙ぐみ」つつ「いつたい、誰が左様にことこまかに見聞したのか」と疑問を呈する。ハツエの語りは、信憑性の不確かなものとして提示されている。

この点に関連して李は、「ハツエに語られる年齢、出身不詳のロポウは、台湾の山地における歴史的に「声」を持たぬ多くの無名の「蕃女」を代表する人物」であり、「書く能力を持たぬ「蕃女」は自らの歴史を記録する能力がなく、その体験はいつも歴史の彼方に置き去りにされている」ため、本作では「女性を主体として霧社事件を表象しようとする意図」があったと適切に論じている（李・前掲（25）論文）。

確かにロポウの生涯は、霧社事件から川中島移住、そして「私」が「蕃地のラブロマンス」に不可欠だと語る日本人巡査との関係など、これまで見てきた原住民女性の物語を凝縮したものであるかのようだ。重要なのは、この象徴化された「蕃婦」の物語が、ハツエと「私」との合作という性質を持つことである。ハツエは「話をする側が話題のなかへ没入し、陶酔状態になつてはじめて完全な一如の世界をつくりなす」のであり、そのためには「きく側も努力すべき」だと、「私」に聞き手の役割を全うするよう求める。そして「私」はロポウの物語を反芻する内に、「ハツエは決してまとまつた筋のことばで私に語つたのではなく、私が補い、想像しホンヤクして、一応のことばによる物語のかたちを整えていた」と考えるようになる。

ハツエは粟酒につられて、日本語・台湾・タイヤル語をごつちやにして、しかも早口でせつせとしやべるから、私は、風車のようにいさぎよく勤勉に廻転しながら、しかとききとるのだが、大半は私の想像を補つての受とり方でしまいには、ハツエのよく動く唇を無心にみとれ、入墨が、筋肉のうごきにつれておどるのを見ながら、私がロポウの話をしているので、ハツエは何もしやべつていないのではないかと思つた。遠い遠いところへハツエが次第に消えてゆき、唇だけが私の眼前にあつて動きひきつるのだ。そしてその唇を開閉しているのが、私なのだ。

作者によると、ハツエには霧社事件で夫を亡くした原住民女性のモデルがおり、日常会話には不自由しなかったが、あくまで「国語の読本」の範囲を出ず、小説では「私のこしらえた方言らしきことばを、いかにも蕃社の人達の日常語のように書いてきた」（〝蕃地〟との関り）。架空の語らいの場面を通して、作者は原住民女性と日本人女性との、あり得たかも知れない交流を描こうとしたのだろう。

李も指摘するように、「私」はハツエの露骨な性的表現に辟易し、また彼女の「動物的な強い」体臭に「一体ハツエは人間なのか、狐狸のたぐいではなかろうか」と感じる。その点では、確かに身体性を強調する造形が成されている。しかし、「ハツエが人間であつて、この強い臭気をもつていてもいい訳で、どうやら私のなかには蕃人というものが、人間外の人間といつた愚かな概念が固定していたようだ」と思い直す。「私」は違和感を抱きながら、語らいの中で次第に自身の固定観念を修正し、ハツエへの認識を改めていく。

最初の夫を霧社事件で亡くしたハツエは、川中島へ移住し、中原の旧「味方蕃」と再婚したが、「オレが嫁いる前に高砂族義勇隊で、出征」していた。従って「婿どのが戻つてきて、オレの体に露をしたたらせてくれたら、オレもみごと返花さかせるかのオ」といった性的表現は、二人の夫を日本の植民地支配によって失った彼女の立場を伝えるものだ。[21] そして同様の身の上にあったロポウについて、「ロポウは、罪をおかすつもりはなかつたのじや、抱かれて、さめて、ああいかん、これは罪じや、と思うたのじや、そしてはまた、片山三郎をみては、魔法にかけられたようにおのれを忘れはてたのじや」「まこと、あわれな女ごじやつたのオ」と解釈する。

既婚者でありながら夫が唯一生存しており、「和服」をまとった「何ものをも生産することのない」生活を、ハツエから「蕃社ではみつともない」と批判された「私」は、むしろ彼女達「蕃婦」から差別化される存在である。自己を異質な者とする彼女達のまなざしを受け止めつつ、その体験を共有しようと努める聞き手の役割こそが、「私」の体現するものだろう。それは受動的な態度ではなく、「きく側」自身の有り様を問い直すことに繋がる。ロポウの死を語ったハツエは、遺された息子の「小猿のような、みにくくしわめた老爺のような顔」に、理由のない憎悪を覚えたと言う。

そこにコチヨリンとこんまい奴がすわつとるのがよ、オレにはロポウを、そげんことにしてしもうた、冷たアいむごオい、何でもかでも世の中のしきたりちゆうもんを、押しつけずにはおられん、何やら目には見えんが、どこやから差図しくさる、どえらい奴にみえたんじや

そして「なぜ憎いか、そげなチンマリした子供を憎いと思う心が、ようわからん」が、「お前は何でも一理屈こねずにはおれん

奴じやで、これも、一こね二こねしてみるがええだ」と「私」に疑問を投げかける。「ラブロマンス」としてロポウの物語を消費していた「私」だが、その美化を拒む要素が結末で示される。あらゆる生の喜びを禁じるという不自然な生き方を彼女に強いたのは、愛する男性の遺児を守るため生き延びるという、まさに「ラブロマンス」的な規範だった。この誓いが交わされるノーカンとの別離の場面は、前述のように、感動的だがあり得ない虚構として描かれる。従ってハツエ（または「私」）の創作が介入している可能性があるだろう。事実、ハツエの目撃したロポウは、余った食事を「小さな息子に与える、というのでもなく」「内へ内へとこもつてゆく」様子だった。

だとすれば、ここで語られるロポウの生涯は、逆にその中に美しい「蕃婦」の「ラブロマンス」を見出そうとする聞き手の側の欲望をあぶり出すものとなる。つまり、「私」もまた同様の物語＝規範に囚われていることを示すのである。

以上のように、坂口の〈蕃地〉小説は「今日の私の問題」を介して植民地支配下の原住民を描くものだった。そこには特に、女性を拘束する性規範への批判という、作者自身の問題設定が強く投影されている。坂口の「蕃婦」像は、自己を捉える性規範が内面化されるプロセスを解明するという意図を持っており、それがジェンダーから見た植民地支配という作品の特異な切り口をもたらしている。

注

（1）〈蕃地〉という呼称の歴史的背景について、山路勝彦は「タイヤル族、ブヌン族、ツォウ族、パイワン族、ルカイ族など山地に住む人たちを「蕃人」、もしくは「生蕃」と規定し、「特別行政区域」に閉じ込め、同化政策を強要してきた」「「特別行政区域」は日本の法体系の及ばない地域であり、「蕃界（地）」とも称され、そこの住民は「蕃人」と呼ばれ、総督府警務局の管轄に置かれていた」とする（『台湾の植民地統治――〈無主の野蛮人〉という言説の展開――』（日本図書センター　二〇〇四・一・二五）。その意味では、日本人の〝未開〟〝野蛮〟という台湾原住民への蔑視と切り離せない言葉だが、歴史的呼称であり、また坂口褧子にとってこの呼称の語感が重要な意味を持っていたことを考慮して本稿では用いる。なお「原住民」とは、現在台湾政府で公認された自称である。

（2）「葡萄」（『斗鶏』四六・一〇・一）、「崩れゆくもの――或引揚者達の対話――」（『無門』四七・一）、「鹿子木村」（『詩と真実』四九・二・二五）、「椿幻想」（『斗鶏』五〇・一）など。

（3）坂口褧子「蕃地作者のメモ」（『文学者』六一・四）

（4）坂口褧子「〝蕃地〟との関り」（『霧社――坂口褧子作品集②』コルベ出版　七八・六・一〇）

（5）坂口褧子「私は熊本を去る」（『熊本日日新聞』六二・二

・二〇）

（6）中島利郎「坂口樗子著作目録」（『日本統治期台湾文学研究文献目録』緑蔭書房　二〇〇〇・三・一〇）

（7）坂口樗子「一九四五年の彼ら――霧社の思い出――」（『中国』六九・八）

（8）坂口樗子「あとがき」（単行本『蕃地』新潮社　五四・三・一五）

（9）呉密察（藤井康子訳）「霧社事件研究の課題」（『日本台湾学会報』二〇一〇・五）は、「史料が日本の植民地政府により残されたものに偏ってきた」一方、蜂起した側は「日本の軍隊や警察に鎮圧される過程でみな殲滅させられるか、自殺に追い込まれた」ために、「原因や準備行動についても、日本の政府側が一方的に推測したレベルに留まる」と指摘する。なお霧社事件の歴史的経緯については、中川浩一・和歌森民男編著『霧社事件――台湾高砂族の蜂起――』（三省堂　八〇・一二・一〇）を参照。

（10）松永正義「日本国内ジャーナリズムにおける霧社蜂起事件」（戴國煇編著『台湾霧社蜂起事件――研究と資料――』社会思想社　八一・六・三〇　所収）

（11）台湾総督府「霧社事件の顛末」（山辺健太郎編『現代史資料22　台湾2』みすず書房　七一・一二・二〇　所収）。なお、文学作品における霧社事件の表象を論じたものに蜂矢宣朗「文芸作品に描かれた霧社事件」（『山邊道』七六・三）・河原功「日本文学に現われた霧社蜂起事件」（『台湾霧社蜂起事件――研究と資料――』所収）があり、共に坂口の作品を高く評価している。

（12）坂口樗子「モデルのある小説」（『熊本日日新聞』五四・八・一八）

（13）坂口樗子「モデルと小説」（『熊本日日新聞』五六・三・一二）

（14）「時計草」改稿の問題については垂水千恵「坂口樗子の『時計草』について」（『天理台湾研究会年報』九四・六）参照。また奥出健「戦時下台湾の「愛」――坂口樗子「時計草」を中心に――」（『湘南短期大学紀要』二〇〇九・三）は、初出と改稿本文を比較して前者では純の方から結婚を申し入れる点に注目し、「高砂族の血を引く男性の主導による結婚」が「日本人社会からみて受入れがたい事柄」だったため削除されたのではないかと推論している。

（15）垂水千恵「坂口樗子・その人と作品」（『日中言語文化比較研究』九三・一〇・一）

（16）星名宏修「「血液」の政治学――台湾「皇民化期文学」を読む」（『日本東洋文化論集』二〇〇一・三）

（17）坂口は三八年霧社を訪れた際に公学校教員だった下山一と出会い、「お母さんが、山の娘さん。蕃婦ということ。それで、内地からお嫁さんをつれてくるのだけれど、何度も逃げられるんですって。とてもやさしいよい先生なの

に、どうしてもお嫁さんが辛抱しないのね」という話を聞いた（「〝蕃地〟との関り」）。

（18）下山操子著、柳本通彦編訳『故国はるか――台湾霧社に残された日本人』（草風館　九九・八・五）

（19）鈴木作太郎『台湾の蕃族研究』（台湾史籍刊行会　三二／復刻版　青史社　七七・一〇・一）

（20）若桑みどり『戦争がつくる女性像　第二次世界大戦下の日本女性動因の視覚的プロパガンダ』（筑摩書房　二〇〇〇・一・六）。戦時下の坂口については、「戦争協力の姿勢があった」という指摘がある（黒川創『国境』メタローグ　九八・二・二五）。しかし「灯」（『台湾文学』四三・四）「曙光」（同　四三・七）などでは生まれない女性達を描いており、同時代言説との距離が注目される。なお坂口は戦後のエッセイで「母情だけが女性のなかで常に賛嘆される、という事実」に「男性対女性の性の――このどうしようとない既定事実の出発点へ振戻されたような羞恥をかんじる」（「スタンド　『女の議会』から」『熊本日日新聞』五六・六・二二）と述べており、母性への懐疑を抱いていたことが分かる。

（21）黄嘉琪「第二次世界大戦前後の日本における台湾出身者の定住化の一過程――ライフコースの視点から――」（『海港都市研究』二〇〇八・三）

（22）田中宏『在日外国人――法の壁、心の溝――』（岩波書店　九一・五・二〇）

（23）例えば尾崎秀樹「決戦下の台湾文学」（『旧植民地文学の研究』勁草書房　七一・六・三〇）、中島利郎「坂口襦子　作品解説」（『日本統治期台湾文学　日本人作家作品集』第五巻　緑蔭書房　九八・七・二〇）など。また小笠原淳は「作家坂口襦子の半生」（『熊本日日新聞』二〇一三・一一・一五～一七）で、「坂口襦子の文学には、女性の身体と家庭を通して描かれた「越境する文学」の原初のようなものを見ることができる」と評価している。

（24）李文茹「偽装アイデンティティ――坂口襦子「鄭一家」をめぐって」（『表現と創造』二〇〇二・七・一）

（25）李文茹「ジェンダーから見た台湾「原住民」の記憶と表象――霧社事件を中心に――」（『社会文学』二〇〇六・二・一〇）

（26）「男性の創りだす理想の女性像は、女性にとつて重大な関心事である。男性は、彼等の芸術において、女性像をえがきあげる。女性は好むと好まざるとに関わらず、自然とその女性像へ向つて誘いよせられる。これは彼等のワナである。男性の好みを押しつけようとするエゴなのだ。気がついた時には、男性の思うままに訓練されている自分を発見する」（「スタンド　女の化粧」『熊本日日新聞』五五・九・一六）、「男に男らしさが求められるのとは、比較にならぬ過重さで、女は、女らしさを求められる。真に、一方的

な考え方だと思われるのだが、あやしまず受けいれられてきた。これは、男が、ながい間かかつて訓練した女の在り様であつて、女は、その狡猾な暗示にかかつて、男達の都合のよい「女らしさ」を身につけようと努力してきた。男に愛されること、妻になることだけが、女の生涯のすべてであつたからだ」（「スタンド　女の幸福」『熊本日日新聞』五六・四・一三）。

（27）霧社事件の生存者だったワリスピホは、高砂義勇隊に志願した理由について「軍隊に志願することで、霧社事件の国賊の汚名というか、心の中で名誉挽回をしようと思う気持ちもあった。忠実なる国民になりきるというか、これで日本人と平等になったという喜びがあった」（林えいだい編著『証言台湾高砂義勇隊』草風館　九八・五・一五）と述べる。原住民にとって霧社事件と高砂義勇隊は一繋がりのものだった。

資料収集に当たり熊本県立図書館・熊本大学附属図書館・熊本日日新聞社データベース部の助力を得た。また本稿は立命館大学日本文学会研究例会（二〇一三年一二月八日）での発表に基づく。御助言・御協力賜った方々に感謝申し上げます。

（くすい・きよふみ　熊本信愛女学院高校常勤講師）

資　料
坂口襧子・『熊本日日新聞』『西日本新聞』寄稿目録

タイトル	年月日	媒体名・発行所	ジャンル
「新潮社賞を受けて」	1953・10・01	『熊本日日新聞』	感想
「主婦と文学　－両立について－」	1953・10・30	『西日本新聞』	随筆
「こどもの頃の正月」	1954・01・01	『西日本新聞』	随筆
「名作現代版　樋口一葉・原作　十三夜」	1954・01・04	『西日本新聞』	小説
「怪談十人集（四）　杉本院自害のこと」	1954・07・19	『熊本日日新聞』夕刊	読み物
「モデルのある小説」	1954・08・18	『熊本日日新聞』	随筆
「短篇十人集　故旧」	1954・09・05	『熊本日日新聞』夕刊	小説
「忘れえぬ人々（一）　終らぬ夜毎の夢」	1954・12・18	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「忘れえぬ人々（二）　付添の小母さん」	1954・12・20	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「忘れえぬ人々（三）　芸術を語る特高課長」	1954・12・21	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「忘れえぬ人々（四）　牢獄の密入国者」	1954・12・22	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「忘れえぬ人々（五）　生命への執着」	1954・12・23	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「奄美かけある記」（上）（下）	1955・03・25､26	『熊本日日新聞』	紀行
「熊本漫筆　郷愁」	1955・04・04	『西日本新聞』熊本版	随筆
「古典の美しさ　妖艶の静・凄絶の知盛　金春流の祝賀演能を観る」	1955・07・06	『熊本日日新聞』	随筆
「地方グループ誌の在り方」	1955・07・25	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　争議の中の娘たち」	1955・08・12	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　嫌天下」	1955・08・26	『熊本日日新聞』	随筆
「五家荘を行く（上）」	1955・09・02	『熊本日日新聞』	紀行
「五家荘を行く（下）」	1955・09・03	『熊本日日新聞』	紀行
「スタンド　母の夢と子の夢」	1955・09・09	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　女の化粧」	1955・09・16	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　すぐれた女性」	1955・09・23	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　虚飾への挽歌」	1955・10・14	『熊本日日新聞』	随筆

「スタンド　花に寄せて」	1955・10・28	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　婦人と読書」	1955・11・04	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　女性は太陽であつた」	1955・11・18	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　棟方氏の版画展から」	1955・12・02	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　師走の艶聞」	1955・12・17	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　春信」	1956・01・06	『熊本日日新聞』	随筆
「リレー漫歩　女性とユーモア」	1956・01・15	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　成人式によせて」	1956・01・20	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　投書夫人」	1956・02・03	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　子どもの画」	1956・02・17	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　モデルと小説」	1956・03・02	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　恋愛の常識」	1956・03・16	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　母の怖れ」	1956・03・30	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　女の幸福」	1956・04・13	『熊本日日新聞』	随筆
「ふるさとの味　つくしとセリ」	1956・04・20	『西日本新聞』	随筆
「私の社会時評　無題」	1956・04・25	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　女らしさ」	1956・04・27	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　地方人の自信」	1956・05・11	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　結婚の祝宴」	1956・05・19	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　或る発言」	1956・05・25	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　第三結婚論によせて」	1956・06・01	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　暴力否定の世界」	1956・06・08	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　『女の平和』を読む」	1956・06・15	『熊本日日新聞』	随筆
「京劇を観る　印象的なメイ・ラン・ファンの白い指」	1956・06・16	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　『女の議会』から」	1956・06・22	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　梅雨ばれに」	1956・07・06	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　売春禁止法」	1956・06・29	『熊本日日新聞』	随筆
「新参議院議員に望む　“一票の願望”知れ」	1956・07・10	『西日本新聞』熊本版	随筆
「スタンド　女の残忍さ」	1956・07・13?	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　スワワ運動」	1956・07・20	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　或る宵のこと」	1956・07・27	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　天孫降臨」	1956・08・10	『熊本日日新聞』	随筆
「平和大会の性格　それは万人の願望である」	1956・08・14	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　女性と平和運動」	1956・08・17	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　ナイトショウ」	1956・08・24	『熊本日日新聞』	随筆
「反射鏡　組合族の存在」	1956・08・26	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　猫と犬」	1956・08・31	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　懸命なるのみ」	1956・09・14	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　母子心中」	1956・09・28	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　十日の感想」	1956・10・12	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　母性のエゴイズム」	1956・10・27	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　愛情の川」	1956・11・09	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　ある会話から始るもの」	1956・11・23	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　恭介の誕生」	1956・12・07	『熊本日日新聞』	随筆
「婦人演能をみる」	1956・12・20	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　暮れてゆく年」	1956・12・28	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　金銀の猫」	1957・01・12	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　ミス・コットン」	1957・01・25	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　春立つ」	1957・02・08	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　さくらんぼの花」	1957・02・22	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　私は再婚した」	1957・03・08	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　貧しさに」	1957・03・22	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　病みあがり」	1957・04・05	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　菜の花」	1957・04・19	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　メーデー」	1957・05・03	『熊本日日新聞』	随筆
「女ごころの衣裳への愛着　森田たま著『きものおぼえ書』」	1957・05・07	『熊本日日新聞』	書評
「悲しみの谷」	1957・05・13	『西日本新聞』熊本版	随筆
「スタンド　神との対話」	1957・05・17	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　ごまめの歯ぎしり」	1957・05・31	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　お米の値上げ」	1957・06・14	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　うちの猫ども」	1957・06・28	『熊本日日新聞』	随筆

「スタンド　ある死によせる」	1957・07・12	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　土砂降り」	1957・07・26	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　ペン供養」	1957・08・09	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　眠られぬ夜」	1957・08・23	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　ブランコ」	1957・09・13	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　彼岸花」	1957・09・27	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　死者のことば」	1957・10・11	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　ファースト・ラブ」	1957・10・25	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　感覚の空白」	1957・11・08	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　たそがれの悲哀」	1957・11・22	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　上昇感覚と下降感覚」	1957・12・06	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　犠牲」	1957・12・20	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　純白の時」	1958・01・10	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　表彰状」	1958・01・24	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　弔辞」	1958・02・07	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　丹花をふくむ」	1958・02・21	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　アラジンのランプ」	1958・03・14	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　人間たらんとする慾望」	1958・03・28	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　時の定着」	1958・04・11	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　春雷の夜」	1958・04・25	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　選挙の思い出」	1958・05・09	『熊本日日新聞』	随筆
「上京と“白い夜”について」	1958・05・18	『西日本新聞』熊本版	随筆
「スタンド　みどりの火焔」	1958・05・23	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　ごう慢なるナルシズム」	1958・06・06	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　くちなしの花と猫と」	1958・06・20	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　舞踊“不知火”をみる」	1958・07・04	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　暑い午後」	1958・07・18	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　小児科の巨人」	1958・08・01	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　亡児への弔辞」	1958・08・15	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　夜があけたら」	1958・08・29	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　革命史を読むことから」	1958・09・12	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　道徳教育への疑問」	1958・10・10	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　双十節の頃」	1958・10・17	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　秋のひと」	1958・10・31	『熊本日日新聞』	随筆
「能面と白い足袋」	1958・10・05	『西日本新聞』熊本版	随筆
「スタンド　一本の樹木」	1958・11・14	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　H 家の悲劇」	1958・12・05	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　人生の賭博者」	1958・12・19	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　七日の話題から」	1959・01・09	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　大臣と学生」	1959・01・23	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　“人間的な”」	1959・02・06	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　夕映え」	1959・02・20	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　読書会」	1959・03・06	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　子供に賭けるなかれ」	1959・03・27	『熊本日日新聞』	随筆
「道成寺演能への期待」	1959・04・11	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　耐える」	1959・04・17	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　不思議な代表者」	1959・05・08	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　静かなるレジスタンス」	1959・05・22	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　組合族の危機」	1959・06・05	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　象牙の塔にこもり給え！」	1959・06・19	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　夕照りの道」	1959・07・03	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　憎まれ子、世にはびこれ」	1959・07・17	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　チエの木の実を！」	1959・07・31	『熊本日日新聞』	随筆
「スタンド　ボク爺さん」	1959・08・14	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　地獄異変」	1959・08・28	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　宇宙母神カリー」	1959・09・11	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　第三者の意見」	1959・09・25	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　黄色い蝶の降る日に」	1959・10・09	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　南禅寺のゆどうふ」	1959・10・23	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　母よ、非情なれ！」	1959・11・06	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　何処へ？」	1959・11・20	『熊本日日新聞』夕刊	随筆

「スタンド　チコとママ」	1959・12・13	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　冬の動物園」	1959・12・27	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　修羅の巷」	1960・01・17	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　遠き灯は消えたり」	1960・01・31	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　奉仕の完成」	1960・02・14	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　母となり給う」	1960・02・28	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　素材の燃焼」	1960・03・13	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「スタンド　春ふたたび」	1960・03・27	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「こぼれ実（1）　出版祝賀会で」	1961・05・04	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「こぼれ実（2）　子ネコあげます」	1961・05・06	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「こぼれ実（3）　山猿にならざるの記」	1961・05・07	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「こぼれ実（4）　父の背なか」	1961・05・08	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「こぼれ実（5）　母の像」	1961・05・09	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「こぼれ実（6）「十二夜」をみて」	1961・05・10	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「こぼれ実（7）　昔を今に」	1961・05・11	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「こぼれ実（8）　蕃地の口碑伝説」	1961・05・12	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「こぼれ実（9）　猫の父性愛」	1961・05・13	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「こぼれ実（10）　こどもの歌」	1961・05・04	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「キョンの話」	1961・10・17	『西日本新聞』	随筆
「師走の町」	1961・12・19	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「日記つれづれ」	1962・01・01	『熊本日日新聞』	随筆
「私の視点」	1962・02・15	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「私は熊本を去る」	1962・02・20	『熊本日日新聞』	随筆
「この東京に生きよう」	1962・04・04	『熊本日日新聞』	随筆
「巨大な妖怪　東京に住んで思う」	1962・04・24	『西日本新聞』	随筆
「若き文学志望者へ　－作品を書くことだけしかない－」	1962・08・14	『熊本日日新聞』	随筆
「バナナ解禁　台湾時代の思い出」	1962・11・20	『西日本新聞』	随筆
「奇跡をうむもの」	1963・05・14	『熊本日日新聞』夕刊	随筆
「奄美思えば　“復帰 10 年”に寄せて」	1963・12・20	『西日本新聞』	随筆
「進学のころ」	1964・04・01	『西日本新聞』	随筆
「三度目の芥川賞候補」	1964・07・09	『西日本新聞』	随筆
「華やかな旋風　－そのからくりの返るとき－」	1964・08・07	『熊本日日新聞』	随筆

〈凡例〉

・本稿は雑誌『日本談義』「文化消息」欄、荒木精之編『日本談義総合索引目録』（日本談義社　1972・5・25）に拠った調査に基づく。雑誌『日本談義』（1938 年 5 月創刊～1982 年 4 月　編輯兼発行人・荒木精之　発行所・日本談義社）は熊本の総合文化誌であり、「文化消息」欄では在熊文化人の動向を記している。坂口褥子の作品が本格的に活字になったのは、同誌に掲載された「スミ」（1939・6、7、9、11、40・2　＊「山本れい子」名）が最初である。